

コンセプト

-外国人観光客と地域の人が
つながるような町に-

外国人観光客に聞き取り調査を実施したところ、「日本人と話してみたい」と思っている人が多くいた。同様に、多くの地域の方が外国人観光客と話してみたいと思っていることが調査により明らかになった。



両者がつながるための「場」と
「手段」を提供しよう！



その1 場の提供

9月
たのも船づくりワークショップ



宮島の伝統文化「たのも船」を作るワークショップを企画・運営した。参加者の中には外国籍の方もいらっしゃり、地域の方と交流する場面も見られた。また、学生は当イベントの講師として船の造り方を一から学び、たのも船づくりの後継者となった。参加者からは「ぜひ来年もしてほしい」という声をいただいた。さらに、テレビ取材が入ったことで多くの人から注目されるイベントとなった。

9月
第5回ちゅうえマルシェ



第5回ちゅうえマルシェを企画・運営した。企画リーダーは学生で、当日運営スタッフもほぼ全員学生であった。県内他大学間でつながり、地域の方とも多く交流した。しかし、広報やスタッフの動きなど課題は山積みであった。

12月
第6回ちゅうえマルシェ



第6回ちゅうえマルシェを企画・運営した。第5回の反省点を改善することに率先して取り組んだ。特に、当イベントを盛り上げるために、宮島え町プロジェクトや宮島町商工会青年部といった地元店舗で構成される団体との連携を強化することに努めた。結果、閑散期にも関わらず多くの観光客が中江町を訪れた。帝京大学三竝ゼミと協力して開発した商品は完売し、地域の人、学生、店舗の方、国籍や年齢を問わず多くの観光客が中江町でつながった。

12月
松明づくりワークショップ



宮島の伝統文化「松明」を作るワークショップの運営のお手伝いをした。参加者の国籍は様々であり、地元の講師の方との交流が多く見られた。学生は、イベント前から、宮島町商工会青年部の方々が実施する販売用の松明作りに参加するなど主体的に学ぶことで、松明作りの後継者となり、当日は講師として参加した。

その2 手段の提供

・ 仮説

やさしい日本語は、一般的に「日本人が学び、使用するもの」として扱われる。しかし、観光地において言えば、やさしい日本語は「外国人観光客が学び、使用するもの」として扱うことで最大限活用できると考える。

敬語表現のうち、尊敬語・謙譲語はやさしい日本語から除外されるが、丁寧語はやさしい日本語として扱われる。しかし、敬語表現は全て、両者の距離感を確保する表現として重要であり、外国人観光客と地域の方のコミュニケーションを円滑にする表現だと考える。

また、今回着目した敬語表現は、理論上、外国人観光客にとって習得しやすいと予想される。

・ 調査

1. 日本語と英語どっちで
観光したい？（昨年度調査より）



日本語で観光したいと答える方が9割という驚異的な割合。しかし、多くの人が「日本語が話せたら」の場合に限ると答えた。

2. 敬語表現に関するテスト

敬語表現は尊敬語や謙譲語など複雑である一方で、習得が簡単なものもあるように思える。今回は「です・ます（丁寧語）」、「お〇〇（例：お店）」が容易に習得可能なか簡単なテストを行った。

「です・ます」→全員正解
「お〇〇」→全員正解

・ 実践



ちゅうえマルシェにおいて、上のフリーペーパーを使用した。内容は、自己紹介など会話の入り口となるようなものである。さらにSTEP2として、さらなる交流へと導くための「何かしないか」という提案をする表現を選んだ。

・ 結果



（写真）外国人観光客と学生がけん玉で遊ぶ様子

外国人観光客に実際にフリーペーパーを見ながら、日本語で様々な人と会話をしていただいた。「とても楽しい思い出になった」、「日本人は本当に温かい」など日本人の人間性に感動する方の姿も見られた。



「場」としての4つのイベントと「手段」としてのやさしい日本語フリーペーパーを通して、外国人観光客と地域の方はもちろん、垣根を越えて様々な立場の人がつながった。

—中江町と創る新しい宮島—
宮島に昔からあるこの土地を「第三の観光拠点」として発展させ、オーバーツーリズムや通過型観光地といった宮島の全体的な課題に取り組み。



宮島観光活性化
プロジェクト